

trivia ■皮膚科のトリビア■ ⑦

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

エコチル調査とアレルギー疾患

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月23日)

環境省が企画する親子10万組を対象とした大規模な出生コホート調査があり、「子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)」と呼ばれている。胎児期から13歳までの子どもの健康状態を定期的にチェックし、環境要因が成長・発達にどのような影響を与えるのかを明らかにすることが目的。環境因子とアレルギーとの関連についても新しい知見が得られることが期待される。これまで10万人の妊婦を対象とした調査で、気管支喘息の有病率が11%、アレルギー性鼻炎が36%、アトピー性皮膚炎が16%、食物アレルギーが5%であることがわかった。

「2011年から全国15ユニットで実施されているそうだが知らなかった。現在対象となる子どもは5歳から7歳くらいになっているので、これからは小児の新しい知見も出てくるだろう。詳しくはエコチル調査のホームページで閲覧可能(<http://www.env.go.jp/chemi/ceh/index.html>)」。

ちょっとむずかしいが、何やらとても大事そうなILC2

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

2010年に同定された2型自然リンパ球

(Group2 innate lymphoid cell : ILC2)は、抗原や他の免疫細胞に由来しないIL-25やIL-33などのサイトカインに反応することで、多量の2型サイトカイン(IL-4, IL-5, IL13)を放出する。寄生虫疾患、真菌感染症、多くのアレルギー性疾患と関わるのが最近注目されている。寄生虫感染ではIL-33によってILC2sが活性化し、積極的な排虫を促すが、虫体が体外に排出された後もILC2sが活性化し続けることは生体にとって危険な状態になるため、IFNやIL-27が出されることによって虫体の排出とともに炎症が収束することが明らかになった。また、IL-33-ILC2s依存的なアレルギー性炎症はIFNやIL-27によって抑制された。これらの知見は今後のアレルギー性炎症疾患の新しい治療戦略を考えるうえで有用である。

「ウイルスや最近に比べると巨大すぎる寄生虫がどうやって排除されるかのメカニズムがおもしろい。IL-27は活性化樹状細胞から産生され、Th17の分化を抑制し、IL-10の産生を誘導するらしい。乾癬やアトピー性皮膚炎の治療にも結びつきそうだ」。

ミルク成分含有下着の即時型アレルギー

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

ミルク蛋白含有繊維(ミルクレーヨン)を使った下着がある。4カ月の男児が、それを着用して30分後に体幹に膨疹と潮紅が出現

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

した。人工乳摂取後にも顔面の潮紅が出現することからミルクアレルギーを疑った。特異的IgEはミルクがクラス3、カゼインがクラス2。パッチテストでは乾燥した生地では陰性だったが、生食に浸した生地では20分後に赤みが出現し、1時間後にはそれが拡大し膨疹となった。発汗の多い時期には同様の症例があるかもしれない。「ミルク入りの下着があるとは驚いた。天然アミノ酸入りで肌ざわりがなめらか、ということらしい。寝具などにも使われているらしく、症例によっては疑ってみる必要があるかもしれない」。

臍帯血TARC値は乳児アトピー性皮膚炎のマーカーになる

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

千葉大学予防医学センターで行っている出生コホート調査(こども調査)によると、生後4カ月までに湿疹を認めた児は74%で、湿疹があった児の臍帯血TARC値は湿疹がない児より有意に高値だった。さらに10カ月の時点でのアトピー性皮膚炎の有病率は、4カ月までに湿疹があった群で30%、なかった群で8%、食物アレルギーは湿疹があった群で15%、なかった群で1%だった。臍帯血TARCが高値だと4カ月での湿疹、さらに10カ月でのアトピー性皮膚炎および食物アレルギーのリスクになる。

「この調査は400組の家族が対象で、2014年

から行われている。正式名称は「胎児期に始まる子どもの健康と発達に関する調査」で、HP(<http://cpms.chiba-u.jp/kids/>)で医師向けのデータが報告される予定とのこと。エコチルより多くの要因の検索が行われているので、こちらの知見にも期待したい」。

「1カ月健診」で乳児アトピー性皮膚炎と診断することが可能か

第67回日本アレルギー学会学術大会から(平成30年6月24日)

「1カ月健診」を行った548名のうち乳児湿疹と診断された児73名(13%)を対象として、プロペトのみの外用を行い、3カ月の時点でアトピー性皮膚炎と診断できる症例がどのくらいあるか、また、1カ月の時点での湿疹病変がどのような状況だったかを検討した。3カ月の時点で症状が確認できた51名のうち、アトピー性皮膚炎の発症ありと診断した児が28名(55%)おり、その児の1カ月の時点での皮膚病変は、非発症群と比較すると、顔の湿疹の面積が広く、頬だけでなく額にも生じていたこと、顔に湿疹局面の形成があったこと(17 vs 4)、体にも湿疹局面の併発があったこと(9 vs 1)が特徴であった。

「日常臨床でもなんとなくは想像はしていたが、実際のデータが示された。ほかに家族歴なども参考にしながら、今後のモニタリングに生かしたいと思う」。